

FRJプレスリリース

第三国定住プログラムによる難民受入れ第3陣（在タイ難民キャンプからのミャンマー・カレン族）が0（ゼロ）になったとの政府発表を受け、日本の難民／庇護希望者を支援する組織の連合体である「なんみんフォーラム（FRJ）」は、今回の事態を大変憂慮しています。

政府発表および複数メディアの報道によると、ミャンマー難民3家族16人は日本での生活準備のために研修を受けていたにもかかわらず、全員が来日直前に辞退しました。報道では、先に来日した家族の生活状況がタイの難民キャンプまで伝わり、日本での生活に不安を感じたこと、難民キャンプに残留する親に反対されたことを理由に来日を取りやめたとされています。

日本はアジアで初めて第三国定住による難民受け入れを開始し、国際社会からも大きな期待が寄せられてきました。また、2012年3月には3年間のパイロット・プロジェクトを5年に延長することも決定され、人道国家として難民保護に本格的に取り組むことをアピールしました。

私たちは今回の事態を重く受け止め、早急に原因を究明すると共に難民支援のあり方を検証すべきです。また、年間30人の受け入れ枠に対して3家族16人しか集まらなかったことから、選定基準等の見直しが必要でしょう。

日本政府は、昨年の UNHCR 本部における閣僚会議で「現行の第三国定住パイロット・プロジェクトの成功を目指し、日本に再定住した難民への支援プログラムを改善しかつ充実させる」と誓約しました。また国会でも「日本は国際的組織や難民を支援する市民団体との連携を強化しつつ、国内における包括的な庇護制度の確立、第三国定住プログラムの更なる充実に向けて邁進する」と決議されています。その実現のためにも、日本政府は次の受け入れを見据えて難民や市民社会を含むさまざまな意見を聞き、支援プログラムの改善および充実を官民協同で実践していくべきと考えます。

2012年10月1日

特定非営利活動法人なんみんフォーラム

Forum for Refugees Japan (FRJ)